

安心のネットワーク

NOSAI

病害虫防除指導報

第379号

令和8年8月17日

発行

秋田県農業共済組合
県北支所 農産課

☎0186-84-8376

水稻定点調査の結果

〈定点調査結果〉

7月末に行った当支所（旧北秋田山本支所管内21地点）

の水稻定点調査における生育調査によると、草丈は**やや長く**（本年平均77.8センチ、平年比101.1%、前年比95.3%）、茎数は**多く**（本年平均22.1本、平年比102.9%、前年比105.5%）になりました。

本年は茎数が充足傾向にありましたが、草丈が前年と比較し短いという結果になりました。

また、同地点で行った病害虫発生観察（斑点米カメムシ類すくい取り調査：本田20回振り、畦畔40回振り）の結果、病害虫が捕捉された地点数は下表のようになりました。

	草丈 (cm)	茎数 (本)
本年	77.8	22.1
平年	77.2	21.6
前年	82.1	21.3
平年比	101.1%	102.9%
前年比	95.3%	105.5%

市町村名	地区名	調査数	カメムシ		イナゴ
			本田	畦畔	
北秋田市	今泉・中畑・大岱・川井・鎌沢	5	0	1	3
能代市	機織・真壁地・久喜沢・小沢口・梅内・富根	6	6	9	5
八峰町	畑谷・水沢	2	0	2	0
藤里町	矢坂	1	0	0	0
三種町	深浜・上砂子沢・中野・槻田・金光寺野・芦崎・沢目 飯塚	7	2	2	4



斑点米カメムシ類に注意



〈斑点米カメムシ類が大量発生〉

秋田県病害虫防除所の調査によると、本年の斑点米カメムシ類の発生が平年よりも多いという結果になりました。これに伴い、7月28日に同所より病害虫発生注意報が発令されました。ノビエやホタルイなどの雑草が多発しているほ場もあるようです。このようなほ場では斑点米カメムシ類の水田内への侵入量が多くなることが懸念されるため十分に注意し、適切な防除に努めてください。

〈薬剤による防除方法〉

水田内で発生したノビエやホタルイなどの雑草が見られるほ場やイネ科植物が主体の牧草地や休耕田が隣接している水田では、2回の防除が必要となります。既に出穂が確認できるほ場もありますので、出穂期（ほ場全体の40%～50%が出穂した日）の把握に努め、適切な防除を徹底してください。

① 1回目茎葉散布…出穂期10日後頃に下表の薬剤を散布する。

薬剤名	散布量または希釈倍数	散布液量	散布時期
スタークル粉剤DL アルバリン粉剤DL	3kg/10a	—	出穂期 10 日後頃
スタークル液剤 10 スタークルメイト液剤 10	1,000 倍	150L/10a	

※1) 薬剤は畦畔を含めて散布する。

※2) セジロウンカとヒメトビウンカにも有効である。

② 2回目茎葉散布…出穂期24日後頃に下表の薬剤を散布する。薬剤抵抗性の発達を防止するため、1回目に散布した薬剤の運用を避け、2回目はエクシード剤またはキラップ剤とする。

薬剤名	散布量または希釈倍数	散布液量	散布時期
エクシード粉剤DL キラップ粉剤DL	3kg/10a	—	出穂期 24 日後頃
エクシードフロアブル キラップフロアブル	2,000 倍	150L/10a	

※1) 薬剤は畦畔を含めて散布する。

※2) エクシード剤はセジロウンカとヒメトビウンカに有効であるが、キラップ剤は両種に効果が劣る。

〈薬剤散布後の雑草管理〉

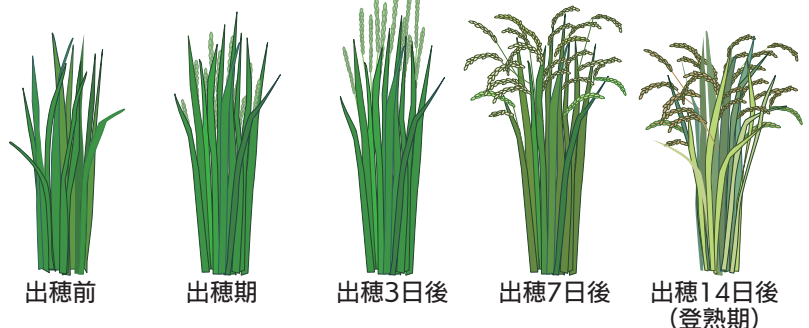
上記①の出穂期10日後頃の薬剤散布当日から散布7日後までに畦畔や農道の草刈りを行い、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努めます。その後、草刈りをする場合は、収穫2週間前以降に行ってください。近隣に水稻以外の作物（野菜等）を作付けしている方や、養蜂業者がいる場合は、薬剤散布前に必ず情報共有をしてから作業を行ってください。

登熟向上に向けた水管理について

〈水管理の徹底を〉

出穂後から開花期は、稲の生育において最も水を必要とし、**水管理が収量や品質を大きく左右する非常に重要な時期**です。水管理における注意点やポイントは、以下の通りです。

イネ出穂前～登熟期



〈水管理における注意点とポイント〉

○出穂後10日間は湛水状態にし、水を切らさないようにしましょう。その後は、**間断かん水**を基本とします。

- ・水位の目安：田面5～6センチ程度を維持してください。

○用水を十分に確保できる地域では、気温が高い日（30℃を超える日など）にかけ流しかん水等を行い、地温を下げ根の機能減退を防止してください。

- ・かけ流しかん水が困難な地域では、開花期後は落水期間の短い間断かん水や午前にかん水するなど、水分の供給と地温の低下に努めてください。ただし、地域全体に水が行き渡るよう、周囲や下流に位置するほ場も考慮し、用水が十分に確保可能な場合のみかけ流しかん水を行ってください。

○フェーン現象など、乾燥した風が強く吹く日は湛水状態を保ち、水分蒸散による稲体の消耗を軽減しましょう。

※水深が浅い場合、水温が上昇しやすくなるため、水深はしっかりと確保してください。

○カドミウム含有米の発生防止対策地域で、「あきたこまちR」以外を作付しているほ場では、田面に空気が触れないよう、出穂期3週間後まで湛水管理を継続し、カドミウムの吸収を抑制してください。

○落水時期の見極めを！

- ・出穂後1ヶ月程度は、米粒にデンプンを蓄え肥大させるために十分な水が必要です。落水を早期に行うと根の機能減退を引き起こし、水分の供給が不足してしまい、登熟不良の原因となります。また、葉色の低下や枯れあがりなどに繋がる可能性もあります。そのため、落水時期は出穂後30日前後以降としましょう。

主要病害の対策を！

いもち病（葉いもち・穂いもち）

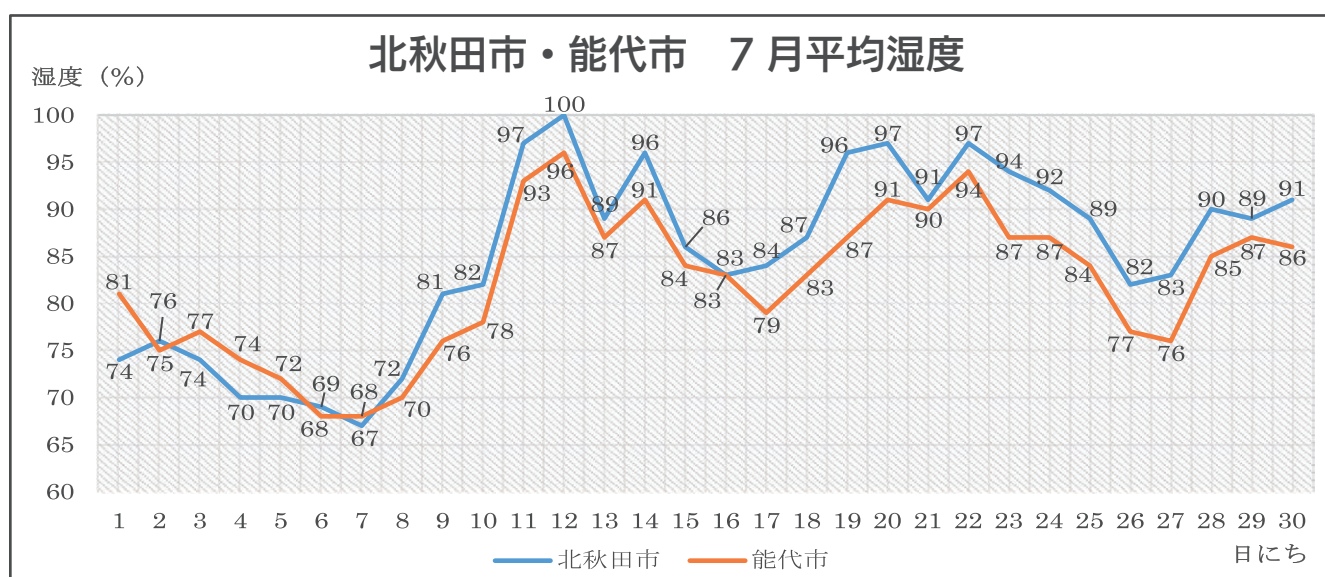
・いもち病と気象状況の関連性

管内の一部は場では葉いもちの病斑が確認されています。葉いもちは7月が少照多湿に経過すれば発生が多くなりやすく、特に山間部、冷水灌漑地でこの傾向が強くなります。



葉いもちの病斑

気象庁のデータによると、下図の通り北秋田市と能代市の7月1日から30日までの平均湿度は、いずれも高く推移しました。



また、曇りの日が続いたことによる日照不足、7月末の継続的な降雨の影響で、穂いもちの発生が見込まれます。（出穂期前後が多湿な年は穂いもちの発生が多い傾向にあるためです。）

・防除対策

出穂直前にトライフロアブル又はビーム剤を散布した場合は、穂揃期にトライフロアブル又はラブサイド剤の茎葉散布を行いましょう。さらに、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行ってください。薬剤の使用回数は上限があるため、既定の回数を超えないよう注意してください。

農薬名	農薬の種類	粉剤DL	ゾル・フロアブル	散布時期
トライ	テブフロキン剤	—	○	出穂直前 穂揃期
ビーム	トリシクラゾール剤	○	○	出穂直前
ラブサイド	フサライド剤	○	○	穂揃期 傾穂期
散布量又は 希釈倍数[散布液量]		3～4kg	1,000 倍 [100～150 L]	